

はとの子だより



No. 7 令和8年3月19日(木)発行

学校教育目標 自律 のびのび きびきび わくわく

影法師の自覚 ～令和8年度の最終日に～

古くから国語科の教科書に掲載され続けている教材に、宮沢賢治が書いた「やまなし」という物語があります。「五月」「十二月」の2場面構成のそれぞれに共通して登場するのは小川の底に暮らすかきの兄弟と父親です。生命活動が盛んな「五月」では一見陰惨な命のやりとりが、幼いかきの兄弟にとって身のすくむような恐怖を与える一方、半年以上を経た「十二月」では、兄弟もそれなりにたくましくなり、川面に突然落下してくる「異物」に対して余裕のあるふるまいを見せます。

物語の終盤、その生命の終焉を迎え、かきの親子に「おいしいお酒」を供する身となったやまなしが川下へと流れていくのですが、作者はその実を追うかきの親子の姿を「影法師」と描写しています。

卒業式があと数日に迫った予行の日、本番さながらの真剣な態度で証書授与に臨む6年生の姿を見て、万感の思いとともに脳裏に浮かんだのが、あの物語の「影法師」でした。間もなく学び舎を巣立つ子どもたちに、次のようなことを思いました。

影法師には2つの意味があると解釈できます。一つは、循環する大きな生命活動の中の小さな存在として自身を捉え悟りを開いた「法師」、もう一つは、誰かの生命にとって脅威となる「影」としての存在です。

卒業していく6年生は、入学時、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、歌ったり身体を動かしたり大勢で集って語り合ったりすること全てが「不要不急」のものとして



厳しく制限されたため、入学式すらできなかった、辛い過去を経験しています。ところが、制限が解除された今では、これらの行為は全て人として成長する上で欠かすことができない重要な教育活動の一つとされています。

影法師やこれらの教育活動に共通しているのは、それらを取り巻く環境や状況次第で、よきものにもあしきものにもなりうるということです。よかれと思ってしたことが誰かを悲しませたり、よい仲間だと思っていた存在が、別の誰かには都合の悪い存在だったり…。

思春期に差し掛かり、複雑になった人間関係に新たな希望を抱いたかと思えば、疲れ悩んだりもする姿、自分の可能性や限界を感じるたびに一喜一憂する姿など、様々な人間らしさを見せてきた6年生です。そんな子どもたちが、予行であっても手を抜くことなく、自分にとっての通過儀礼を高い意識と誠意をもって果たそうとする姿に、誰もが、そして何もかもが「影法師」であるという自覚をもって、少しでもよきものであろうとするための判断力を磨いていってほしいと願いました。

ご卒業おめでとうございます。巣立っていく6年生の姿は、まさによきものとしての「影法師」でした。



令和7年度卒業証書授与式 校長式辞

冷たい風が柔らかに光り始める時、季節は冬に終わりを告げ春の訪れを迎え、新しい命の息吹をそこかしこに生み出しています。

6年前の令和2年2月27日全国の小中高に臨時休校要請、3月11日WHOがパンデミック宣言、4月7日緊急事態宣言、例年のような入学式は断念。新型コロナウイルスに翻弄された約4年間を乗り越え、今年度創立151年目のリーダーとして、本校の歴史に新たなそして見事な一頁を刻んだ94名の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。また、この6年間支えてこられた保護者の皆様、お子様のご卒業、心よりお祝い申し上げます。

さて、自然のサイクルでの命には、始まりがあり、終わりもあります。今年1月27日米国の科学雑誌Bulletin of the Atomic Scientistsは、地球滅亡までの残り時間を象徴的に示す「終末時計」が残り85秒と過去最短となったことを発表しました。要因として、核軍拡リスク、AI開発競争、気候変動による大災害、米中露による敵対的・国家主義的傾向の加速化、国際理解協力の弱まりを挙げています。発表会見でベル代表は、世界のリーダーたちの指導力欠如に警鐘を鳴らす一方、「誰もが時計の針を戻す努力に参加できる。Everyone can do something.」と述べ、私たち一人ひとりが、よりよい社会へと積極的に働きかけ、社会を変えていく力を備えていることを強調しました。

皆さんはこの1年間、学校をよりよく変える力を存分に発揮してきました。では、学校とは異なる社会においてはどうでしょう。複雑に絡み合う社会、変えることは並大抵の事ではありません。しかし、不可能ではありません。その一例を示すのが、今から50年前のアイスランド。女性たちが真の男女平等を求め、1975年10月24日全女性の90%が仕事も家事も一斉に休み、女性なしでは社会が回らないことを証明しました。そして現在、男女の平等度合いを示すジェンダーギャップ指数は148カ国中16年連続で1位。立場と環境の異なる女性たちが連帯して成功させたこの社会運動は、The Day Iceland Stood Still、直訳で「アイスランドが止まった日」、「女性の休日」という日本語のタイトルで、現在ドキュメンタリー映画として公開されています。

この映画の中で語られていたことばを紹介します。

「時代の先駆者はいつも、はじめに無視され、次に笑いものにされ、やがて攻撃される。そして最後に勝つのです。」

理不尽に打ち砕かれ屈するどころか、強い信念でその理不尽を原動力に変え、不断の努力で平等を勝ち取ったのです。偶然にも、この不屈の精神は、校歌第三章に「あらし吹くとも たじろがず 強くは向かうたくましき 精神（こころ）と身体（からだ）」と謳われています。

自然の一部である私たちは、生まれると同時に終わりへと近づいていく運命から逃れることはできません。しかし、私たちが命のバトンを渡しながらかつないでいく社会の運命は、私たち自身が握っていると言ってもよいでしょう。終末時計の針を戻すことは可能でしょう。志高く力強く進んでいってほしいと思います。ただ、強さの一方で、小さき弱きものをいたわり慈しむ賢さも身につけなくてはなりません。校歌第二章「いたわりあひて 進まばや」とある慈愛の心を忘れず、果敢に困難に立ち向かえば、校歌第一章にあるように、人生における「真理（まこと）の花」を咲かせることができるはずです。

皆さんを見ていると、その表情や姿から、命は輝いていると実感します。大人になっても、その純粹さを失わないでほしいという願いを込め、茨木のり子の詩「汲む」のほんの一部分を朗読します。

あらゆる仕事

すべてのいい仕事の核には

震える弱いアンテナが隠されている、きっと……

平和の象徴であるはと、そのはとを守るべしと、校歌の最終行で私たちは誓います。信念をいだき、弱い者への慈しみを忘れず、「震える弱いアンテナ」を心に宿し、社会全体の幸福を考え実行できる人に成長することを期待します。

今、万感の思いを込め、卒業おめでとう、そして皆さんに声援を送り続けることを約束します。

令和8年3月16日
秋田大学教育文化学部附属小学校長 佐々木雅子

